

Acts 27:14-44, 28:1

### 嵐

(使徒27:14)「ところが、まもなくユーラクロンという暴風が陸から吹きおろして来て、」

ユーラクロンとは何でしょう？ルカは当時のとても専門的な航海術用語を使っています。これは北風と関係があって、実際、ほんの少し東よりの北から吹いて来ます。言い換えれば、この嵐はヨーロッパから吹き降ろして来ました。ときは冬で、嵐の季節でした。この風は「暴風(tempestuous wind)」で、パウロと彼と一緒に船に乗っていた人たちはこの嵐に巻き込まれたのです。

ここでちょっと、とてもおもしろいことを指摘したいと思います。パウロがエペソで福音の宣教の勝利を飾ったとき、彼は切実にローマに行きたいと言ったことを思い出されるでしょう。それは彼の心からの願いでした。

(使徒19:21)「これらのことが一段落すると、パウロは御霊の示しにより、マケドニヤとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。そして、『私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ』と言った。」

エルサレムでは、パウロに暗闇のときがやって来しました。そのときには、彼は絶対にローマを訪れることはないように見えました。その暗闇と、絶望と、敗北のときに、神さまはパウロに現れ、再び保証されました。

(使徒23:11)「その夜、主がパウロのそばに立って、『勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならぬ』と言われた。」

主は、パウロに彼がローマに行くことを保証されたのです。

(使徒27:15-18)「船はそれに巻き込まれ、風に逆らって進むことができないので、しかたなく吹き流されるままにした。しかしクラウドという小さな島の陰に入ったので、ようやくのことで小舟を処置することができた。小舟を船に引き上げ、備え綱で船体を巻いた。また、スルテスの浅瀬に乗り上げるのを恐れて、船具ははずして流れるに任せた。私たちは暴風に激しく翻弄されていたので、翌日、人々は積荷を捨て始め、」彼らは地中海でクレテ島から西へ流されていました。彼らがクラウドという小さな島に打ち上げられるのは必至のように見えました。ちなみに、クラウドというのは、クレテの南のとても小さな島です。彼らは風に任せるしかありませんでした。船を軽くするためにすべての積荷を捨てました。

(使徒27:19)「三日目には、自分の手で船具までも投げ捨てた。」

彼らは、重いものは何でも完全に船から捨て去りました。

(使徒27:20)「太陽も星も見えない日が幾日も続き、激しい暴風が吹きまくるので、私たちが助かる最後の望みも今や絶たれようとしていた。」

ルカは、「激しい風が吹きまくる(訳注:例によって、英語では控えめな表現に訳されています。ここでは no small tempest すなわち、「小さな暴風雨ではなかった」となっています)」と言います。もうすでに、ルカがこのような控えめな表現を好んで使うことを見てきましたね。彼は、これはひどい嵐だったと言っているのです。事実彼らは、生きてこの嵐からのがれられるとは思っていませんでした。この嵐の中で、パウロの唇を通して主の御声が語られました。

14日間の波と風のあと、船に乗っている人々は、生きて帰ることはできないと感じました。これで一巻の終わりだと感じていました。ところが、主がパウロに現れて、彼は必ずローマに行くと保証されたのです。この確信によって、パウロはほかの人々の上に立つことができました。

(使徒27:21-26)「だれも長いこと食事をとらなかったが、そのときパウロが彼らの中に立って、こう言った。『皆さん。あなたがたは私の忠告を聞き入れて、クレテを出帆しなかったら、こんな危害や損失をこうむらなくて済んだのです。しかし、今、お勧めします。元氣を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う者は

ひとりもありません。失われるのは船だけです。昨夜、私の主で、私の仕えている神の御使いが、私の前に立って、こう言いました。「恐れてはいけません。パウロ。あなたは必ずカイザルの前に立ちます。そして、神はあなたと同船している人々をみな、あなたにお与えになったのです。」ですから、皆さん。元気を出しなさい。すべて私に告げられたとおりにになると、私は神によって信じています。私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます。』

これは、船に乗っていた人々にとって、とても大きな励みだったとことを理解することができます。事実、このことは彼らが頼りにするべき唯一のことでした。使徒パウロのすばらしい証しを見てください、

「私の主で、私の仕えている神」

彼の確信は神さまにありました。

「元気を出しなさい。すべて私に告げられたとおりにになると、私は神によって信じています。」

彼らはどこかの島に打ち上げられるということがパウロに示されました。あとになって、この島はシシリヤのすぐ南のマルタ島であったことが分かります。ですから、彼らはクレテ島から地中海をかなりの距離旅したのです。

**（使徒27:27）「十四日目の夜になって、私たちがアドリヤ海を漂っていると、真夜中ごろ、水夫たちは、どこかの陸地に近づいたように感じた。」**

アドリヤ海はイタリアとマケドニアまたはギリシャの間にあります。見たところ、彼らは嵐の中でアドリヤ海を上下しながら、クレテ島とシシリヤ島の間を通り過ぎたようです。彼らは深いところ、開けた海に出ました。14日目の夜の真夜中ごろ、彼らがどこかの陸地に近づいていることが分かりました。

**（使徒27:28－29）「水の深さを測ってみると、四十メートルほどであることがわかった。少し進んでまた測ると、三十メートルほどであった。どこかで暗礁に乗り上げはしないかと心配して、ともから四つの錨を投げおろし、夜の明けるのを待った。」**

彼らの測深は、陸地に近づいていることを示していました。測るたびに、水深が浅くなっていました。

ここで、お話しておくほうがよいと思いますが、私は、「四つの錨」についての説教を聞いたことがあります。この四つの錨に、世にあるあらゆるものをなぞらえるのです。とても現実的で実際的なものを霊的なものにしようとする罠にはまらないようにしようではありませんか。この人々は船に乗っており、彼らは陸地に近づいていました。彼らは暗礁に乗り上げることを恐れたので、四つの錨を投げおろしました。船を固定するためには、四つ全部の錨が必要でした。もし、あなたや私を固定するためにはいくつの錨が必要か、などと考え始めたら、あなたはこの箇所を霊的なものに行おうとしているのです。私の判断では、そのようなやり方は、神さまのみことばを扱うのにはとても愚かな方法です。

**（使徒27:30－31）「ところが、水夫たちは船から逃げ出そうとして、へさきから錨を降ろすように見せかけて、小舟を海に降ろしていたので、パウロは百人隊長や兵士たちに、『あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたも助かりません』と言った。」**

水夫たちはご覧のように、船を見捨てようとしていました。錨を降ろすように見せかけていましたが、実際は彼らが船から降りようとしていたのです。沈んでいく船からねずみが逃げ出すように、彼らは逃げかかっていました。彼らは自分たちが絶対にすべきでないことをしていたのです。

パウロは、百人隊長にすべての人が船にとどまらなければ、安全は保証されない、と言います。パウロは、神さまに信頼を置いています。神さまのみことばを信じるのは、なんとすばらしいことでしょう。神さまの御使いがパウロに、彼も人々も助かると告げたのです。でも、自分たちのやり方では助かりません。神さまのやり方でなければならないのです。神さまの方法は、彼らが船にとどまることでした。神さまが助けてくださることを信じるか、信じずに自分たちの手で何とかしようとするかのどちらかでした。パウロは彼らに、自分は神さまを信じていると言いました。そしてパウロは、もし彼らが助かりたいのなら、すべての人が船にとどまっていなければならないと言います。

**（使徒27:32）「そこで兵士たちは、小舟の綱を断ち切って、そのまま流れ去るのに任せた。」**

パウロは、百人隊長に情報を提供しました。百人隊長は今、パウロの言うことを聞き始めました。彼が命令して、兵士たちは小舟の綱を断ち切ります。今、すべての人が船にとどまらなければなりません。

**（使徒27:33-34）「ついに夜の明けかけたころ、パウロは、一同に食事をとることを勧めて、こう言った。『あなたがたは待ちに待って、きょうまで何も食わずに過ごして、十四日になります。ですから、私はあなたがたに、食事をとることを勧めます。これであなたがたは助かることになるのです。あなたがたの頭から髪一筋も失われることはありません。』」**

14日間の断食では、もっとも屈強な人たちでさえも弱ってしまうことはよくお分かりでしょう。今、パウロはみなに食事を取るように促します。見たところ、彼らすべてが断食していたようです。異教徒たちは、死ぬほど怖がっていたので断食しました。パウロとクリスチャンたちは、主のために断食していました。今彼らは陸地に近くなり、岸にたどり着くためには力が必要です。そこでパウロは聖化された健全な考えを、主の奉仕のために用います。彼は良い思慮を用いています。

クリスチャンの働きの中では、人生のほかのどの領域にも増して、私たちは良い、聖化された常識を必要とします。人々は、とても愚かなことをしながら、同時に主をただ信頼しているから、と言うことによってその愚かなことの言い訳をします。主は私たちが常識を使うことを期待しておられます。

**（使徒27:35）「こう言って、彼はパンを取り、一同の前で神に感謝をささげてから、それを裂いて食べ始めた。」**

パウロは彼らすべてのいるところで、神さまに感謝をささげました。これもまた、すばらしい証しです。これが、パウロの、ローマへの順調な旅なのです。

「あんまり順調には見えないなあ！パウロが神さまのみこころから外れているように思えるよ！」

と言われるかも知れません。いいえ、そんなことはありません。パウロは神さまのみこころからはずれてはいないのです。

福音書の中で、主イエスがある夜、ご自分の弟子たちを小舟に乗せてガリラヤ湖を渡らせたときのごとを覚えておられますか？主は彼らに向こう岸へ渡るように言われ、その途中、湖に嵐が起きました。主は彼らを嵐の真ん中に送り出されたのです。さて、イエスさまは嵐の来るのをご存じなかった、などとは言わないでください。主はわざわざ彼らを嵐の中に送られたのです！主は神さまです主は嵐のことを知っておられ、また、ご自分が何をしておられるかも知っておられました。

私は個人的に、多くの場合に主は私たちを嵐の中に送られると信じています。私たちは神さまのみこころのうちにいても、嵐の中にいることもある、ということ覚えておく必要があります。主は一度も、私たちが人生の嵐に会わないとは言われませんでした。でも、主は私たちが港につくことができることを約束されたのです。そして主はその嵐の中でも私たちとともにいてくださるのです。嵐のときに神さまの子どもにはそのような慰めが来なければなりません。

**（使徒27:36-37）「そこで一同も元気づけられ、みなが食事をとった。船にいた私たちは全部で二百七十六人であった。」**

276人が船に乗っていました。結構大きな船でしたね。

**（使徒27:38）「十分食べてから、彼らは麦を海に投げ捨てて、船を軽くした。」**

彼らは前にすべての積荷を海に捨てました。今、彼らはすべての食べ物を海に捨てます。

**（使徒27:39-44）「夜が明けると、どこの陸地かわからないが、砂浜のある入江が目にとまったので、できれば、そこに船を乗り入れようということになった。錨を切って海に捨て、同時にかじ綱を解き、風に前の帆を上げて、砂浜に向かって進んでいった。ところが、潮流の流れ合う浅瀬に乗り上げて、船を座礁させてしまった。へさはめり込んで動かなくなり、ともは激しい波に打たれて破れ始めた。兵士たちは、囚人たちがだれも泳いで逃げないように、殺してしまおうと相談した。しかし百人隊長は、パウロをあくまでも助けようと思って、その計画を押さえ、泳げる者がまず海に飛び込んで陸に上がるように、それから残りの者は、板**

切れや、その他の、船にある物につかまって行くように命じた。こうして、彼らはみな、無事に陸に上がった。」

彼らの上陸は奇蹟的なものでした。ただ、私はこれが奇蹟だったと主張することはしません。でも、神さまは確かにパウロに対する約束を守られ、船に乗っていた276人すべての人々が無事に上陸しました。

## 28章

テーマ:パウロ、ローマに到着する。

この最後の章で、私たちはマルタからローマへとパウロを追って行きます。パウロがローマに到着したとき、彼はまず最初にユダヤ人たちに伝道し、それから異邦人たちに伝道します。物語には締めくくりがなく、パウロがローマで説教している場面で突然終わっています。聖霊の働きは、私たちのこの時代にさえも、まだ完結してはいません。使徒の働きは、携挙をもって終わることになるのです。

### マルタ島上陸

(使徒28:1)「こうして救われてから、私たちは、ここがマルタと呼ばれる島であることを知った。」

この出来事の起こった湾は、現在聖パウロ湾として知られています。私たちのように第二次世界大戦のときに生きていた人たちには、ここはとても興味深い場所です。第二次世界大戦の衝突の一番最初に、この島が新聞の見出しに載ったのです。この場所は戦略的な位置にあったので、戦争のときにもっとも爆撃を受けた地点でした。その当時、ダービー元帥が、島の総督でした。彼はクリスチャンで、使徒パウロの跡継ぎにふさわしい人物でした。彼は、降参するつもりはさらさらないと、言いました。パウロがこの湾に上陸し、ダービー元帥がその同じ島で指揮を取ったことは、興味深いと思います。

確かにこの難船とパウロのマルタ島への上陸というできごとの中に、私たちは使徒パウロの人生における神さまのご配慮を見ます。このすべては、私たちが学ぶために記録されているのです。